

町民参加の町史づくり



1995.9.30(土)

第 8 号

竹富町史だより



1950年8月 獲博見学記念

竹富町史編集室

沖縄県石垣市字大川10番地
TEL・FAX兼用 (09808) 2-9985

目次

『竹富町史』第十一巻資料編「新聞集成Ⅱ」発刊
第十回町史編集委員会
『戦さ場の実相』
女子挺身隊として兵隊と一緒に
中国戦線から護郷隊へ
戦時・戦後体験記録の募集要項
『戦跡をたずねて』
機銃眼跡
『写真に見るわが町』
黒島中学校野球部
『新聞で知る町の今昔』
小浜校に愛の贈物
『歴史散歩』
宇多良炭坑丸三鉱業所跡
『文化財探訪』
仲間第一貝塚
『聖地めぐり』
真徳利御嶽
収蔵図書紹介
業務日誌
編集後記

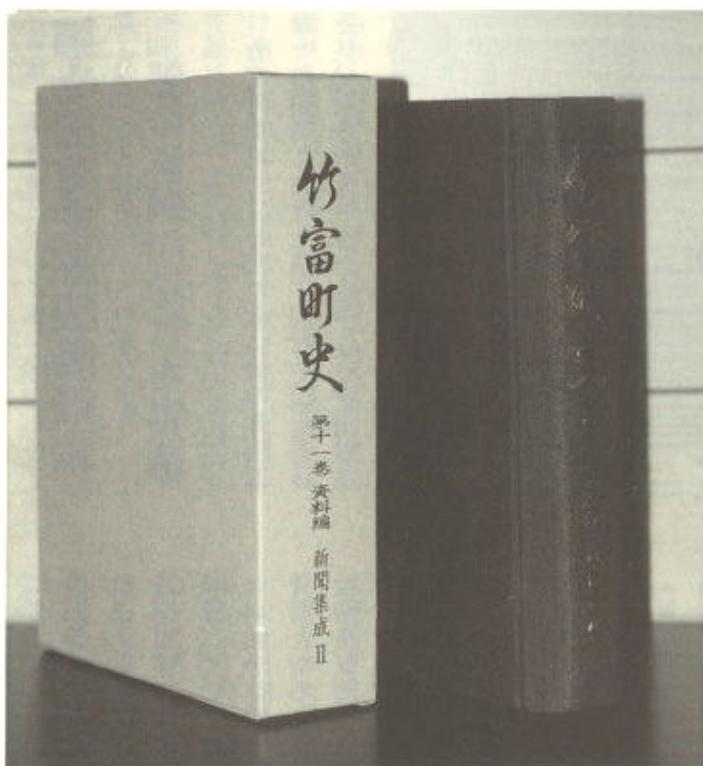
(29) (26) (22) (21) (20) (19) (18) (17) (16) (15) (8) (3) (2) (1)

•表紙の写真•

八重山は太平洋戦争により壊滅的な打撃を受け、戦後は混沌とした社会情勢に陥った。このような中で住民は再起に情熱を捧げた。八重山復興博覧会は政治、経済、教育、交通など全般にわたり活力ある社会建設を図ろうと1950年（昭和25年）に開催された。波照間では小学校高学年、中学校が同博覧会を見学した。（写真提供・波照間小学校）

『竹富町史』第十一卷資料編「新聞集成II」を発刊

大正六年～昭和八年の記事収録



発刊した第11卷資料編「新聞集成II」

竹富町の大正中期から昭和初期までの新聞記事を収録した『竹富町史』第十一卷資料編「新聞集成II」を、このほど発刊しました。平成五年度に発刊した「新

聞集成I」に次ぐもので、記事は大正六年から昭和八年までの時期を扱っており、政治、経済、文化、教育など多方面にわたります。

「新聞集成II」は八重山で戦前、発行された「先島新聞」「八重山新報」「先島朝日新聞」「八重山民報」を用いて編集しました。発刊に向けてはマイクロフィルム化された四紙の複製本を石垣市立図書館から借用して編集を進めました。作業は、まず

竹富町と関係のある記事を検索し、見出し一覧表を作成することから着手しました。そして編集小委員会で第一次、二次、三次と記事の評価を行ない、最終的に収録する記事を決定しました。記事は八百八十七項目に達しました。記事を選択する中で不採用となつた記事は百二十八項目となりました。

新聞の特徴について「新聞は、その時代を映す鏡であり、同時代の証言者でもある」と一般的に言われます。本巻は地元紙を使用したため親密的に感じます。記事は大正期において西表島の炭鉱に関するものが多く、炭鉱社会の一端を垣間見ることができます。それにカツオ漁、マラリア防圧の記事もあります。昭和期に入つては竹富村（当時）の財政、政治、特に村長選挙の報道は新聞社の姿勢が表れています。

編集構成は巻頭に口絵、本編には年次解説、総説を配し記事を概括的に把握する手立てとしました。巻末には索引、略年表等を入れました。なお本巻は文教図書㈱八重山支店、山田書店で販売しています。額価二千円。

第十回町史編集委員会

『戦争体験記録』を審議



「戦争体験記録」の編集を審議した第10回町史編集委員会

竹富町史第十二巻資料編『戦争体験記録』の発刊に向けた第十回町史編集委員会が、六月十日午前十時から町史編集室

で開かれました。同巻は戦後五十周年記念事業の一環として平成七年度に発刊されるものです。編集委員会では編集構成及び原稿の添削、収録原稿の選定、原稿執筆について審議を重ねました。

『戦争体験記録』の編集は現在、基礎資料となる「戦災実態調査票」を町内各世帯及び郷友会を対象に配布、六月十日現在で七百八十世帯を回収し「戦争体験手記」は六十七人から寄せられ「戦争体験証言」は七十一人から聞き取りを行ないました。

同巻の編集に向けて町史編集室では、「陸軍本籍地名簿」などの援護関係資料、「沖縄戦全戦没者名簿」、さらに「八重山兵団防衛戦闘覚書」の旧日本軍関係資料、小学校沿革誌も収集し編集の基本資料としています。戦時中の新聞記事も検索しています。町史編集委員会では編集構成は『戦災実態調査票』等の資料に基づき、十五年戦争を視野に入れ、島じまの戦争の様子と竹富町民の戦争体験の両面から迫り、竹富町の戦争の実相を浮き彫りにすることを基本的な姿勢とし、作

業することを確認しました。

編集構成は具体的には総論として(1)戦争の道程（軍国体制下の沖縄など）(2)沖縄戦の始まりと展開（沖縄守備軍の設置など）(3)八重山戦の経過（船浮要塞の建設など）(4)戦時下の住民（強制疎開とマラリアなど）(5)戦後復興（疎開地からの引き揚げなど）を項目設定し、各論としては(6)住民の戦争体験記を入れることを審議しました。『戦争体験記録』の目玉は「住民の戦争体験記」です。同記には島別・地区別戦没者実態調査表、地区別・年齢別・性別戦没者実態調査表、さらに地区別単位の世帯別戦災実態調査表、昭和十九、二十年当時の集落地図、戦争体験記を盛り込むことを確認しました。

『戦争体験記録』に収録する手記については、各編集委員が年代など形式的なことについて原稿チェック、聞き取り証言に関しては証言者本人に原稿を確認して再度、編集委員が目を通すことが申し込みされました。総論は編集委員会による原稿執筆になりますが、今後、執筆分担は小委員会で決める、としました。

『戦さ場の実相』

—島じまの語り部たち—

女子挺身隊として兵隊と一緒に

玉代勢 タツ子

◆塩づくり作業

私は戦時中は挺身隊として兵隊と一緒に行動しました。黒島にはその頃、十人ぐらいの兵隊がいました。部隊の名前は分からぬが、広井少尉がいたことは覚えています。挺身隊は当番制で兵隊の食事を作ったり、塩づくりをさせられたりしました。

塩づくり作業は伊古の東海岸にある砂浜の上の平坦になった場所でやりました。海から潮水を汲み、担いできて砂浜を駆け上って砂の上に潮水をかける。そして乾燥させる。また海に行つて潮水を汲み、そして砂にかける。そのようなことを何度も繰り返して塩をつくりました。

塩づくり作業は五人ずつ当番でやりましたが、仕事をしている時、敵機がやつ

て来ることもありましたので、逃げ場所を見つけて急いで隠れました。作業は一度ではできないので交替でやりました。

バーキに砂を入れてそれを平坦になった所にこぼす。このような事を何回も重ねました。五、六ヶ所に塩田を作り、そこに潮水を汲んできてかける。そしてそれを広げる、乾燥させる、ということを繰り返しました。

このようなことを数回行なっているうちに、塩らしい汁物が徐々にできてきます。それを炊き上げると塩ができるときます。そのような作業を何回も繰り返し行ないました。猛暑の中の作業には苦労させられました。

出来上がった塩は軍の船で石垣島に運んで行きました。塩を運んでいる時に、たまたま大雨があつて塩は雨で濡れてしまつたが、それに対して、ある人々は「ユー、シッタイ」と言いました。軍隊にこき使われて難儀している。こんな事はもう嫌だ、と思っていても口に出しては言えない。それで塩が濡れたことで喜びを表す。このような事だったと思います。

◆西表島に疎開

黒島では空襲がある中で疎開をしました。最初の頃は島内での避難だったが、東筋では部落の東あたりの林の中に仮小屋を造って、そこで住んでいました。その後空襲が激しくなったので、軍の命令で西表島に強制疎開をさせられました。東筋はそうでしたが、多分、他の部落も同じだったと思います。はつきりしたことは覚えていないが、疎開したのは昭和二十年の夏ころで、避難していた期間は広井少尉の島での滞在期間から推測しておそらく三ヶ月ぐらいではなかつたのではないか。四、五ヶ月はいなかつたでしょう。

島の住民は革命により疎開しましたが、私たち挺身隊は残りました。疎開したのはお年寄りと子供が中心でした。広井少尉は「疎開は命令だ。八十歳になる人も行きなさい」と言って、疎開拒否は許しませんでした。「アメリカ軍が上陸してきたら島に残っている人はスペイとみなす」と話していました。疎開する前は部落で避難所造りに行くという事で、各家

庭から一人ずつ出るよう言わっていました。私の家では私が行く事になりました。私の家では兄が兵隊にとられているし、私が長女だから行くことになったのです。

島の住民はこうして疎開しましたが、最初の頃は私の家では食糧はありました。私の家にはちょうどその頃、畑に粟がありました。ものだから、それを刈り取って食事の準備をしました。おかげで山羊などを潰し塩漬けにして疎開地に運びました。私は部隊と一緒に住民とともに疎開しなかつたが、避難した人たちの食事作りに三回ほど西表島に渡ったことがあります。西表島に疎開していたのは三ヶ月ぐらいだったから、食糧を食べるには量的にはゆったりとありました。

しかし疎開から戻ってくる多くの人々は食糧不足で大変でした。しかし私の家では別の畑があり、疎開から帰ってきても収穫できる粟がありました。だがそれも最後は食べ尽くしてしまい、ソテツを食糧にしました。

塩づくりは住民を疎開させてから広井

少尉の指揮下で行ないました。軍から命令された仕事は塩つくりのほか、奉仕による畑作業もありました。島の人々からの要望によって仕事をしました。「粟畑の雑草を取って頂戴」ということもありました。雑草は人間の背の高さぐらいになっていて、これを作業分担して取り払いました。畑作業や塩つくりなどが挺身隊の仕事で、塩が雨で濡れた時は隣の一級先輩の姉さんと一緒にになって「よかつたね」と言いながら塩つくりさせられたことを怒っていました。

広井少尉は兵隊を統率し、彼らは玉代

勢の家ではなく、別の家に宿泊していました。私たちが食事をする所は玉代勢ではなく、ミーフナトヤー（船道家）でした。広井少尉の部隊は兵器を持っていました。当時は楽器がある訳じゃないし、みんなで歌をうたいました。私はそれまで西表島の稲葉にある営林署に働いていましたので、その頃覚えた「山の神まつり」という演芸をやりました。その芸は歌うもので軍服を着けて帽子をかぶり

「男度胸は肌身に…」と歌って踊りました。演芸会の観客は広井少尉が率いる兵隊と私たちの挺身隊だけです。私がうたつた歌は兵隊は分かりましたが、挺身隊の人は分かりません。演芸会には私の部落から出演する人がいなかったため、私が出るようにならうのです。出演する時、兵隊さんの洋服を借りてきて頂戴、と頼んで持ってきてそれを着け、手には刀の代りに竹を持って歌い踊りました。兵隊も私の歌に合わせて歌い、合唱となりました。私の芸に兵隊は喜んでいました。

黒島には広井少尉の部隊のほか、山川という本土の人がいました。彼は顔が大

きくちょっと太りぎみで兵隊なのか、一般の人なのが分かりませんでした。一人で黒島に来たようです。姿は一般住民のようであり、軍服も着けていませんでした。彼は青年学校で生徒を教えたりしていました。本当に怪しげな人間でした。彼は私がマラリアにかかり、熱を出している時に薬を持ってきてくれるなど、優しそうな人でした。

私と友人の国吉のハツちゃんはいつも一緒にいました。ハツちゃんは美人で奇麗な人でしたから広井少尉から可愛がられていました。西表島の避難地にも行きたいが、そこには味噌やほかの調味料があるから広井少尉から黒島では味噌なども作らなければなりませんでした。疎開地に行くからということで広井少尉に「連れて行って下さい」とハツちゃんと相談して言うと「連れて行ってあげるよ」と言いました。そうすると終戦になりました。結局、疎開地に行かないいうちに終戦になったということです。

山川さんはおとなしいかどうか、分からませんが、私たちには優しかった。い

つも学校にいて先生のようで、青年団を訓練していましたと思います。でも彼はどちら来たのか分かりませんでした。戦争だが軍服も着けていません。髪形は丸坊主ではなかつたような気がします。広井少尉は兵隊だから帽子を被っていて髪形は分かりませんが、当時は長髪はないでしょう。

山川さんは兵隊ではないだろうか、という話しが出ていました。小浜ハルさんによると戦争が終わると同時に、どこかへ行つてしまつたということです。あの人はどこから来たのだろうか、不思議です。黒島に広井少尉など兵隊がまだ来なか、どうか分かりませんから黒島では味噌なども作らなければなりませんでした。疎開地に行くからということで広井少尉宿泊している場所は玉代勢さんの家でした。そこには南洋から来ている未亡人がいて、山川さんの面倒をみていました。

広井少尉などの兵隊は玉代勢には宿泊せず、別の家に宿をとっていました。広井少尉は船道家に寝泊りしていました。部隊が家屋を使うことができたのは、そ

こに住んでいる家族が西表島に疎開していましたからです。広井少尉と山川さんは同じ島にいましたが交流があつたか、どうかよく分かりません。

◆稻葉から黒島、石垣島へ

私は西表島の稻葉で働いていたが、昭和十九年に黒島に引き揚げてきました。

その頃は島には青年団でも十八歳未満の人がいて、その人たちは西表島の祖納で兵隊の訓練を受けていました。黒島に行くことになったのは兄さんが海軍に志願して合格し、午後八時に出発するから兄さんに会つたほうがよい、ということでお父が私を連れに来たからです。稻葉はその年、水害があつて兄さんが兵隊に行くということで父が私を連れに来たのは水害の二、三日後だったと思います。

当時、稻葉には海軍の荻原部隊がいて、その部隊が所有している船で午後四時に稲葉を出発しました。稲葉には製材所があるため、軍の船はいつも往来していました。船は浦内川を通りカンピラの滝の手前で停泊しました。昼間は空襲がある

ため出航することはありませんでした。夜になるのを待って石垣島に向けて出航しました。

小浜島の近くに来ると、石垣島の桟橋あたりから高射砲がポンポン飛んで来るのです。それは敵機を目標にして射撃をしていました。私は怖くなつて機関長の部屋に急いで潜り込みました。その時、これは大変だと思いました。船は午後八時過ぎに石垣島の桟橋に着きました。そうしている中で午後八時に兄たちは全員、現在の八重山郵便局の南側にあつた町役場に集合したがその時、八重山で第一回目の空襲がありました。そこで一端、宮古島に渡ることになったのです。宮古島でも敵機の攻撃が激しくて、結局、戦地には行くことができなかつたと言います。

私が桟橋から上ると、兄さんは「飛行機がやられたから行くことができなかつた」と言って町役場に集まっていたとのことでした。その時空襲があり、町役場に集合していた人たちは解散してしまったといいます。そして後日、船で宮古島

に行つたが、敵に迫られて宮古島から出航することができなかつたのです。

私はその時、一応、石垣島に泊まつてから黒島に帰りました。島に帰ると避難所は東筋村の東の森の中に設けてあり、空襲がある時はそこに避難していました。妹とともに畑にイモ掘りに行つたときのことだが、B29機が偵察していました。すると私たちは空襲があると思い、体を伏せたりしました。B29機が遠くに去り、無事にイモを掘り終えて家に戻つてきました。B29機は偵察のため島の周囲をぐるりと回っていたのです。偵察した後、空襲があつたり爆弾が落とされたりするので住民は村はずれに避難していました。

私はイモを掘ってきて早朝にイモのおにぎりを作りました。朝早くそれをしないと煙りが見えるということで、機銃掃射があり大変になります。おにぎりを何十個も作つて午前六時頃避難所に届けました。住民が避難してからは空襲はありませんでした。

島ではあちこちに防空壕が掘られました。空襲や爆弾投下があると、そこに逃げ込みました。爆弾が落とされると土煙が上がりります。東筋部落の大通りに並行して大きな爆弾が二発落ちました。しかし不発弾でよかつたのです。学校にはロケット弾が二十発余りも撃ち込まれました。だが島に兵隊が来てから空襲があつたかどうか、覚えていません。でも敵機は来ていたように思います。

◆肉用牛の供出、そして終戦

黒島は戦前から畜産が盛んでした。各家では肉用牛をたくさん飼育していました。そこに軍は目を付けたのでしょうか。石垣島のワアシャー（屠殺業者）が島にきて、勝手に牛を潰して持って行きました。おそらく軍の食糧にしたと思します。肉は私たちが炊き上げて送り出しました。ナイチャーレの兵隊はみんな悪い人でした。少なくとも良心的ではなかつたと思します。そうしているうちに終戦になりました。町役場から「日本は戦争に負けた」という通知がありました。島ではそれを知らせる人がいました。

戦後は食糧難から始まりました。生活

していくためにまず食糧を確保しなければなりません。島にはソテツがたくさんあるので、それを採集して来て食べることにしました。最初は実を割り一週間以上にわたって発酵させて白でつき、それを何回も水を替えて細かく砕き、アクを抜きアズキなどを入れると最高でした。

出来上がると寒天のようになります。それをしゃもじを使ってすくい上げて食べました。

実がなくなると、今度は幹を切り取り中の芯を取つて発酵させて食べました。食べる方法は、芯を斧や刃で刻んでワラ袋をかぶせ、水抜きをして食べました。ソテツはアクを抜かないと危険で間違うと中毒して死亡にします。このようにしてソテツは、中毒しないように気をつけ食べ、腹のたしにしました。食糧難には本当に苦労しました。ソテツを食べているうちにアメリカ軍から缶詰などの食糧配布がありました。

島ではマラリアにかかる人が数多くいました。石垣島に避難している人もいましたが、その人たちもかかりまし

た。私はマラリアには西表島で避難小屋を造りに行つた時にはかからなかつたが、戦後かかりました。西表島に疎開している人は戦後、荷物を抱えてクリ舟で島に帰つて来ましたが、マラリアにかかる人がほとんどでした。

マラリアにかかると寒気がします。火に暖まるともっと寒くなります。発熱すると水で冷やすなければいけません。そうしているうちに私は段々と元気になりました。体が回復しつつある中で五人組を作つて午前、午後それぞれ四時間、畑に出て雑草取りなどに精を出しました。

今は孫も成長して平和に暮らしています。

作業をしていて午後三時になると、寒気がしてきます。そうすると畑の中で石を積んである場所を見つけて、陽に当たり一時間ほどすると治ります。そしてまた仕事を続けました。

私たち五人組は時計を持ってあちこちの畑作業に行きました。作業姿は赤い紐を付けた揃いの笠をかぶつたものです。

このような姿で仕事をしました。農作業は午後一時から二時までは休憩時間で、その間は有意義に娯楽をしました。友人

のハッちゃんはマラリアが酷かつたが、その後、元気になり五人組と一緒にになって煙の雑草取りに出掛けました。

私のマラリアは一ヶ月ぐらいして治りました。当時は医者もおらず大変でしたが、山川さんがマラリアの薬を持っています。私はその薬を飲んで熱を冷ましたと思います。それにまたヨモギの葉を細かくつき、汁にして飲みました。戦後は食糧難で非常に苦労しました。

今は孫も成長して平和に暮らしています。戦争は兵隊も、そうでない人も全て犠牲になるので二度とあってはなりません。

(現住所) 石垣市石垣六四番地
(出身地) 黒島(当時)十七歳

(採録者 通事孝作)

中国戦線から護郷隊へ

島仲清志

◆支那事変に参戦

太平洋戦争が始まる前に私は現役で入隊しましたが、それからすぐ支那事変に行くように命令を受けました。久留米第十八連隊に入隊して召集を受け、門司港を昭和十三年五月四日に出航し上海、広州に渡り警備に就きました。それからバイス湾で敵前上陸を果たしました。

昭和十四年には南寧作戦、オウエン作戦に参加して中山警備に就きました。その後、分中山作戦、ヒンヨウ作戦、オウエン作戦に参加して広東警備に就きました。そして久留米第十八連隊に復帰、満期になりました。しかし、その後また応召されて第四遊撃隊第四中隊に召集されました。遊撃隊は通称、護郷隊と言われているもので、そこには約一年半ほど勤務していました。そうしているうちに終戦となりました。

◆本土の人との対決

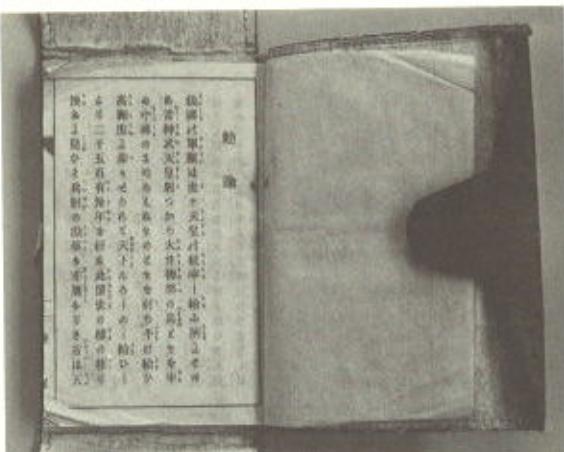
軍隊では上官の命令には、どんなことでも従わなければなりません。そして実行に移すということになります。私の部隊には本土の人がいて沖縄から来た人たと行動の仕方が違うのです。私は田舎から来ているが、農業で鍛えた体ですから肉体的には本土の人は負けませんであります。その頃、他府県人は沖縄の人の言葉が分からぬと言っていました。言葉が

支那事変は私の体験の中では杭州湾、バイアス湾上陸から始まりました。同湾敵前上陸が主な任務です。それから南支那の方で、警備に就いて南寧作戦に參加しました。その後、次々と作戦があり苦しい思いをしました。バイアス湾での敵前上陸をした廣東という場所はイギリスの植民地だったが戦闘の結果、陥落させて入城しました。そこはマラリアが激しい所でイギリス軍は、マラリアには勝てなかつたようです。そういう中で日本軍は廣東に入城し、昭和十六年まで頑張っていました。

私たちの場合は、日本語は読み方の本でちゃんと示されてある通り話しているので、本土の人たちに「君たちの方が一言一句おかしいじゃありませんか」といって強く出た訳です。「私たちの話す言葉が本当の日本語、標準語であって君たちが言うのは標準語になっていません」と言いました。言葉のことで言い争いをしましたが、後は相撲をとったり野球をしたりしましたが、私たちは絶対に負けませんでした。

すると、他府県人は「あなたたちは空手もできるのか」と言ってきました。それは空手で壁を崩せるのか、ということを聞いているらしく「空手をやつてくれ」という訳です。そこで私たちは「それじゃ、まずあなたからやってみるか」というと「自分をやらないでくれ」と言うのです。また空手で壁を壊すということだが「壁

を壊すと君が責任を持つのか」と言いました。壁を壊すと上官に叱られますから、それはしないという訳です。



軍隊手帳

全うし、指示を受けた命令を忠実に実行すればよい訳です。

◆夜間行軍の辛さ

軍隊で苦しいのはまず夜間行軍です。

行軍する時は絶対に明かりをつけてはいけないのです。電燈は将校が持つてはいるが絶対に使いません。夜間行軍ではそうでした。さらに昼間も行軍しますが、昼間は暑いし水が欲しいのです。数多くの人が行軍すると水を飲むのに大変です。時々、道路に溜まった水まで飲み乾したこともありました。流れる水はきれいが、溜まっている水は汚いのです。しかし腹をこわすということはありませんでした。

水の確保は山岳地帯では本当に困りました。山の下の方では、水の不自由はそれほどまで苦しくありませんでした。しかし上流の方では水が少なく苦労しました。山の中にいるときは水は沸騰しなければ飲むなと言われていました。だが沸騰させることどころではありません。どうせもう明日は死ぬ身だから、ということでお腹を満腹飲んで死のうとの勢いで敵に対抗

しようと思つていました。夜間行軍は全く明かりはありません。周囲は暗く、ちょっと離れていても人影は見えません。だが小さな声は聞こえます。

行軍している時は、人影を見逃さないように進まなければなりません。行軍は音も立てずに隠密行動です。夜、音を立てる響くので静かにしなければなりません。明かりの点灯もできません。進む時はただ、前にいる人を頼って前を目指すだけです。

◆歩哨の苦しさ

軍隊で苦しかったことは、この他にも歩哨に立たされた時です。これは午後九時後だが一時間ほど寝る時間がありました。しかし充分に睡眠をとらないうちに時間がです、という場合もありました。そうして眠気を覚まして起き、そして歩哨に立つのです。歩哨の役割は大事なものですが、確実にしないと部隊が全滅してしまう重大な任務です。そのため緊張感は高まります。

戦闘中はいつも緊張の連続です。だれ

もそうだったと思います。また寒い時は苦しかったけれど、部隊にいる時は半畳ほど携帯天幕を持っていて、露營する時は支柱を建て、すぐに就寝することができるようになっていました。その時は歩哨で寝起きしながら立ちますが、それが大変でした。

歩哨は昼間を問わず立っていますが、昼は高い所、夜は低い所について周囲に監視の目を光らせるということになります。低い所にいると人の動きは分かりませんが、高い所にいるとすぐに目標になります。歩哨に立つ人は部隊の見張り役で人馬とか、戦闘に関わる全てについて責任を持っています。歩哨が油断をすると部隊は敵にやられてしまします。それだけ責任重大です。

◆敵前上陸

バイアス湾に上陸する時、船中では軍紀に特に厳しいのです。明かりもつけられません。どんな小さい紙切れも流すことができません。それは紙切れが流れると潮流の関係で、紙切れが適の陣地に

まで着く恐れがあるからです。そうなると敵は日本軍が近くに来ているということを感じることになります。

そういうことで敵前上陸の場合はどんな物でも全て船で処分しました。どんなに小さい紙切れでも焼いてはならない。

これは文字を書いてあろうが、書いてなかなかうが焼き捨ててはならないということです。そうすることによって敵前上陸はスマーズにいきました。戦争中で苦しかったことは夜間行軍、寒さ、歩哨でした。

中国大陸から日本には広東を出発地にして帰ってきました。それは昭和十六年の初め頃だと思います。そして八重山に戻ってきました。日本に一端戻ってから中國とか外国には行きませんでした。

◆護郷隊に入隊

八重山に帰って来ると西表島の護郷隊に召集されました。護郷隊と一般に言いますが本当は遊撃隊です。地方の住民を隊員として当てています。隊員は普段は軍服を着けているが、髪は長くてもよろしいということです。

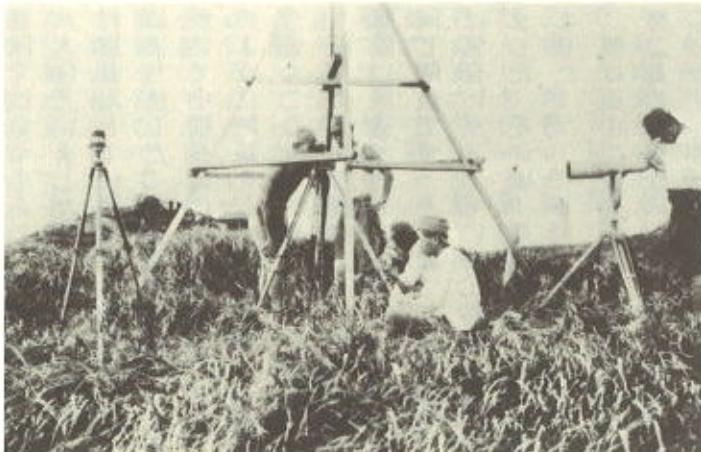
西表島に行ったのは、昭和十八年頃の八月か九月頃だったように思います。場所は祖納の方です。その前には内離島に

日本の軍人は普通、髪は丸刈りですが、護郷隊員は長髪しても構わないということです。それはいざ、という時には民間人に入化けるようにしなければならないということだったからです。そのため隊員恰好とかは別の軍隊と較べて異例でした。

護郷隊の使命というのはどういうことか、といいますと当時の西表島の船浮港は良い軍港でした。そのためアメリカの軍艦が入港し、ここから上陸するという虞れがありました。軍艦が駐留しているとしますと、護郷隊員は部落の住民に化けて船浮港にはどれくらいの軍艦が来ているのかを調べたりします。それにあれこれ聞き取り調査などをして情報収集をする訳です。

◆護郷隊の任務

石垣島に出た時があつたが、空襲が激しく桟橋や護岸などに弾丸が飛んでいました。護郷隊の演習というのは御座岳、祖納岳、波照間森、ウシク森に兵舎を造り訓練をしていました。戦争には降伏があるが、我々は降伏しないで西表島を含めて八重山が占領された後になつてから



内離島での実地測量

活動するということです。占領された後が護郷隊の出番なのです。

訓練は昼間、偵察をしたり斥候（せっこう）したりしました。状況判断の訓練ではこっちに何がある、あっちに何があるという具合に見回ったりするのです。訓練ではまた时限爆弾を持たせて夜、軍艦が来たということを想定して、时限爆弾を軍艦に装置し、陣地に戻ってくる時間はどのくらいなのかということも行ないました。その中で設置後、戻ってくる時間を考え、時計の針を設定します。

そうしないと決めた時間に爆発しないからです。思った通りに爆弾を爆発させないと効果は薄くなります。

◆護郷隊員のこと

護郷隊では待命者として青年学校の生徒を召集し教育していました。また指導もしていました。しかし住民に教育するということはありませんでした。我々の部隊は「兵隊さん、兵隊さん」といって島の人たちに可愛がって貰いました。その時、西表島の人はみんないい人たちだ

なあ、と感じました。

活動は終戦の昭和二十年までに行ないましたが、隊員は約百二十人ぐらいでした。その中で青年学校の生徒を召集したのです。生徒は竹富村の島じまから来ていましたが、ただ波照間島からだけは来ていませんでした。竹富島、小浜島、黒島、鳩間島からの召集がありました。青年学校の生徒の他、班長クラスがいて、その人たちは常置員といっていました。いわゆる古参兵のことです。

護郷隊は通常の軍隊とは違います。常置員がそうであり、班長とは言わずに常置員といつていきました。また行動も変わっていました。仮に船浮港に敵の軍隊が忽然と入港して來た時、我々が無抵抗だということを敵が悟った時に初めて護郷隊の出番となります。

部隊では食糧も弾薬も山に横穴を掘つて積んで置きました。そのようにして敵の上陸に備えました。常置員は支那事変で戦ってきた人たちです。部隊の上官はそこで戦った経験を持つ人で、指揮官として召集されていました。

部隊では命令もあり、上官は本土の人で八人ほどいました。名前は小野隊長、上村班長などで任務は部隊を指揮することありました。指揮官のもとに下士官がいて中隊長の仕事をしていました。このように階級をしつかりしないと仕事がうまくこなせない訳です。

軍隊ではこの人たちに島を監督させていたということです。護郷隊の連中は、このようにしてあちこちの島に派遣されるのです。名前は全て偽名です。

護郷隊では武器というのはそんなにありませんでした。時限爆弾とか迫撃砲といつた部類です。部隊では一個小隊が編成されました。普段は静かに活動しているが、いざという時には山岳に逃げ込むのです。逃げる時に備えて山にはしっかりと活動小屋を造り、倉庫を設けてありました。その頃、空襲が激しくなってきました。

彼は途中で波照間島に派遣されるのを

徳之島の遊撃隊に行かされる命令を受けている、と言っていましたが、結局、波照間島に行くことになりました。つまり

軍隊の命令というのはそれだけ秘密な訳です。彼は波照間島に行くとはいわず秘密にしていました。山下は偽名で本名は酒井清です。

竹富町のほかの島にも山下のような人物が派遣されています。黒島には山川登がいました。これらは全て偽名なのです。

引っ張って敵艦まで持っていきました。いわば決死隊のようなものです。

敵艦には見張りがいますから敵艦に接近する時は、音を立てずに静かに進んで行く訳です。その時、人間が立てた音が魚か何かの音に間違って聞かれても困る訳です。

青年学校から護郷隊に入隊してきた人の中には海に慣れ、泳ぎの上手な生徒など様々な人がいました。部隊では各人の特技を見分けてうまく活かしていました。上村軍曹や五十嵐軍曹とかは上官として部隊を指揮していました。

◆敵軍上陸を想定した訓練

護郷隊は敵が上陸してきた時に、山岳地帯でゲリラ作戦を展開しますから、夜間行軍という訓練は厳しくやった訳です。

船浮に敵の軍が入港した時に夜間、軍艦に时限爆弾を付ける訳ですが、この時に仲良川にいる護衛艦では近付くことができないのです。ではどのようにして时限爆弾を敵艦に付けるのかというと、桶に

时限爆弾を入れて浮かせて泳いでそれを一応、郷里に帰りまた何ヵ月かして隊員として呼び戻され、教育を受け気を緩めないようにして召集され訓練されるとい

う具合です。

護郷隊では一応、軍服を着けさせました。頭髪は一応、丸刈りということになりました。これは待命者の青年学校の生徒のことです。常置員は一応、戦地に行つて帰ってきた人たちです。日常は祖納部落に滞在していました。そこには兵舎もありました。兵舎は外離島、内離島にもありました。

私が最初に召集されたのは内離島の方で、そこには兵隊から帰ってきた人とか、乙種、丙種の合格者で軍隊に行かなかつた人たちがいて訓練をしました。当時は白浜あたりは空襲で激しくやられているのです。空襲でやられるのは、ほとんど船です。船の中には座礁しているものもありました。戦闘機にとってはいい餌だと思っていましたのでしょうか。戦闘機は人がいるとか、いないとかに限らず機銃を仕掛けてきました。座礁している船にも機銃を浴びせていました。

西表島西部には当時、軍隊もいましたが空襲があつても砲撃をすることが許されていませんでした。軍隊では命令は絶

対ですから撃つななどと従わざるを得ません。命令なしでは撃つことができないのです。私たちは常置員だが、上には上がいまして上官の命令がなければ一発も撃つことができません。

この時、敵の戦闘機の能力が優れていて、我々がやっている銃撃では敵機の機体には届かないという話しがありました。B29がくると隠れるしか方法はありませんでした。戦闘機が相手では護郷隊の戦争ではありません。結局、われわれが準備したものは何も使わずに終戦になったのです。

◆護郷隊の戦争

日本は戦争に負けましたが、当時、終

戦と言わずに沖縄がやられる、八重山がとられる、と言っていました。西表島の船浮に敵が上陸するのですが、護郷隊はこのような状態になつた時に活動することになりました。

護郷隊には護郷隊としての戦争がありました。結局、日本が降伏してしまったので護郷隊の戦争はありませんでした。

八重山の護郷隊は戦争をせずに終わった訳です。

護郷隊には手回しの無線機を持っていましたので、それを用いて電波を発信しました。

無線機は山岳の兵舎の方に置いて、当番制の勤務で使用していました。全ての連絡は無線機を用いて行なっていました。無線機は手回しであるため交替しながら二、三人で発動機を動かして発電させ一人は送受信をしました。送受信は暗号を送る受ける仕事で三人の通信班がいました。こうしている時、日本の神風が負けたという情報を入手したので小野隊長は石垣島に船を出して渡り、日本は本当に負けたのかどうかを確かめ、明らかに負けたことを知つて戻つてきました。

◆敗戦そして復員、故郷へ

日本は戦争に負けたということで、兵器類を全て返納しました。兵器は菊の御紋が記されているため、これをカナノコやヤスリで×のキズを付けアメリカ軍に引き渡した訳です。兵器にはどんなものでも菊の御紋がありました。それを×印

をつけて返納の準備をしていました。そうしている中で食糧はありません。

私は当時、苗字は竹越であったが、その時、波照間島から来ていた例の山下が私に「竹越、黒島に帰っても食糧はないよ。ここにあるものを持てるだけ、持つて行ったらどうだ」と教えてくれました。

山下はこれまで波照間島にいたが復員ということで、島では危ないからと言って西表島に来ていたのです。波照間島を離れたのはおそらく船でしょう。護郷隊はまだ解散しないのに山下だけは波照間から引き揚げてきているのです。

護郷隊は山に食糧をたくさん持っていました。戦後、それを使いましたが祖納の人たちは護郷隊の持っていた食糧で助かったと思います。戦争が終わると私は祖納から黒島にすぐ戻りました。

あの頃は島にはクリ舟がたくさんあって航行していたので、それを利用する

ともできました。舟はまず石垣島に行き、それから黒島に渡るのです。祖納から東部の由布島歩いて行けば、黒島行きの舟はあるとのことです。それは由布島に

は戦争中、黒島からの疎開があり多くの人たちが暮らしていたからです。

祖納から由布島に行くには、海岸線を通りて行かなければなりません。船浦あたりは海の中を歩き、別の所は潮時を考えて満潮になつたら浅い島の岬を歩くのです。干潮に遭えば幸いだが、遭わないとき着物を外して頭上に乗せ歩かなければなりませんでした。そのようにして由布島に行き黒島に帰ってきました。

護郷隊にいた別の島の人も自分自身で帰るようになりました。黒島に帰ってみると、家屋は崩されていて住む所がないのです。その頃はソテツを食糧として漬していました。最初は実を利用していましたが、しまいには幹を使わなければ食糧の確保ができませんでした。終戦直後は本当にソテツで命びろいをしたような気がします。

◆母親の訓示

戦争は負けてよかつたという感じがします。もし勝っておればどうなっているでしょうか。私の家は私が支那事変から

帰る前に建てておきました。当時、中国大陸で現地満期したらどうかという話もありました。満期して島に帰ってきて母親に相談したら「支那には絶対行くな」ということです。黒島から行くことはできなきない、ということです。

今、考えると親の話しを聞いて良かつたと思います。終戦後、島の人々は全部、戻つて来て自分の住居を求めました。人々は体一貫で戻つて来ています。多くの人を見て初めて親のいうことを聞いてよかつたという感じを受けました。護郷隊には波照間島から常置員だけで待命者はいませんでした。

(現住所) 竹富町字黒島一四九九番地
(出身地) 黒島 (当時) 二十八歳
(採録者) 通事孝作

戦時・戦後体験記録の募集要項

一、募集対象者

イ、戦前の竹富村民及び現在の竹富町民。

ロ、竹富町民で戦争を体験されたことのある方。

ハ、沖縄県内及び本土在住の竹富町出身者。

二、戦後復興を（生活等）竹富町内で体験された方。

ホ、当時、竹富町に駐屯していた軍隊等。

二、記録の対象期間

一九三一年（昭和六年）満州事変

）一九七二年（昭和四七年）五月十五日本土復帰まで。

三、原稿の枚数

四百字詰め原稿用紙の五枚から二〇枚程度。

四、原稿の締切

平成七年十一月末日までとする。

五、収録決定は、竹富町史編集委員会が行います。

六、収録の場合添削があるます。

七、収録された方には冊子（体験記録）

編集取材協力記念タオルを進呈します。

八、提出した原稿は、返却いたしません。

九、原稿には、住所、氏名、現在の年齢、昭和十九年当時の年齢生年月日、職業もお書きの上、左記竹富町史編集室あてにお送り下さい。

十、聞き書きをしてもらいたい方も左記へご連絡下さい。

▼連絡先

二九〇七

沖縄県石垣市字大川一〇番地
竹富町役場（町史編集室）

（一九八〇年八月一十九九八五年）

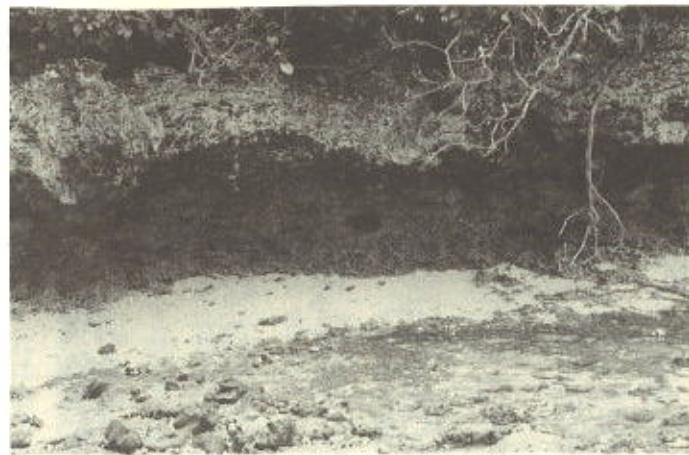
戦争体験記録の編集

竹富町史編集室では現在、第十二巻資料編「戦争体験記録」の編集に向けて戦争体験に関する手記の募集及び証言の聞き取り調査に取り組んでいます。手記はこれまで六十七点寄せられ、聞き取りは七十一人から行ないました。収集した体験内容を読みますと戦地に出向き戦闘に参加した人、石垣島で飛行場造りに動員された人、八重山高等女学校の生徒で海軍及び陸軍、野戦病院に従軍看護婦として駆り出された人、国民学校生徒だった人など様々です。そこには戦地行軍、空襲、疎開、軍作業等があり住民の辛苦て苦しい体験があります。

今年は戦後五十年になります。戦争の実相を明らかにする中で、戦争体験者の高齢化が進んでおり、早急に戦争体験者の証言記録を戦争資料として残していく必要があります。これは恒久平和を願う立場から重要です。戦争体験記録は戦争を知る証として編集することは大切です。

《戦跡をたずねて》

機銃眼跡



皆治海岸近くにある機銃眼跡

竹富島は戦時中、石垣島に守備隊本部を置く独立混成第四五旅団（旅団長・宮崎武之少将）通称、宮崎旅団の石垣地区

ほか、東畠広吉少佐（高級部員、參謀任務）、金谷純雄中尉（次級部員）小山靖大尉（通信班長）、緒方雪男大尉（副官）横田勲大尉（軍医部長）等だった。

八重山は昭和十九年十月十二日に初空襲があり、翌年二十年には一段と激しさを増し、住民は山奥に避難した。旅団本

部は状況逼迫に伴い、昭和二十年六月十日の甲戦備移行と相前後して、於茂登岳に戦闘司令所を移動した。竹富島には独立歩兵第三〇一大隊（大隊長・阿部繁少佐）第一中隊（大石喬隊長）通称、大石部隊が守備隊として配置された。

独立歩兵第三〇一大隊は一九四四年（昭和十九年）八月十一日、高知市で再

陣地南西地区の防衛区域に組み込まれていた。

宮崎旅団は当初、宮古島に司令部を設置したが、昭和二十年八月、守備担当区域が八重山に変更になったため、司令部要員は宮古島を海路出発して石垣島に到着した。八月二十三日のことである。旅団司令部は早速、八重山農学校に設置された。司令部の主要将校は宮崎旅団長の

任務に就いた。兵員百五十人が配置され、島の防備に当たった。兵舎は竹富国民学校の校舎を使用、部隊の軍事拠点となつた。島では大石隊長の指揮下で青年たちを対象にした様々な軍事訓練が行なわれた。

宮崎旅団は米軍は南方から上陸すると想定したのか、竹富島を石垣島の橋頭堡にするためコンドイ浜からアイヤル浜の南海岸に機銃眼を設けた。その数は調査によると六カ所確認されている。

機銃眼は波打ち際の岩をくり抜いて上部から人間を入れるように設計されている。上面には直径約八〇センチの穴が掘られ、それが斜め下に五、六メートルほど延び、終点は空間になり、側面にはタテ十五センチ、ヨコ二十五センチの大きな岩穴が二口あり、銃口をセットするように掘られている。掘り抜き作業は大石部隊が行なった。結局、機銃眼は設けたが実戦はなく、使用することはなかつた。

（通事孝作）

《写真に見るわが町》

黒島中学校野球部

日本のJリーグがスタートし、児童生徒の間にサッカー熱が高まっているが、それでも野球には根強い人気がある。学校には野球部があり、大会に向けて選手は猛練習に励み、白球を追う姿が見られる。甲子園の全国高校野球大会はつとに有名だ。望郷意識をくすぐり地元代表チームには声援を送り、スタンドは多彩な応援合戦で熱気を帯びる。

八重山の昭和三十年代において中学校スポーツ大会の競技種目は、男子は野球、女子はバーチャルボーラーというのは普通だった。野球は最低九人の選手が必要となる。生徒数が九人だと全員レギュラーとなり、選手の怪我は許されない。大規模校は生徒数が多いため大会への出場は問題ないが、生徒数が九人以下の小規模校では選手確保が無理なため、大会への出場を断念せざるを得ない。

黒島中学校は戦後、新学制の発足により設置されたが、生徒数は最も多い時で百三人（昭和二十五年）、本土復帰までは五十人を堅持していた。平成七年度現在は五人、とても野球ができる状態ではない。しかし同校でも以前、八重山教職員主催の野球大会に出場した経験がある。写真是昭和三十六年に開催された大会前に撮られたものである。ユニホームの「KUROSI MA」の文字がまぶしい。選手の表情もりりしい。

（通事孝作）



黒島中学校野球部員の晴れ姿

新聞で知る町の今昔

小浜校に愛の贈物

る見舞状と特効薬『犀角』を寄送』の記事を確認した。

新聞記事は三重県師範学校附属小学校

尋常科四年生が、麻疹にかかった小浜尋常小学校の児童が一日も早く回復して元気になってほしい、と『犀角』を送付して感謝を受けたというものである。記事には「実践躬行の徳操は即ち道徳的生活の完全である、人類相

愛は我等のとるべき途にして且つ大国民として将来国際上にも極めて肝要で殊に我が國の如き人口稠密の島国

に如斯国民性の養成の必要なるを切に愛するものである」と書き綴っている。

「犀角」の贈り物を受け、小学校は

大いに感謝の意を示した。

麻疹はビールスによって起ころる急性の発疹性伝染病で、幼児期にかかり終生免

疫を得ることが多い。発熱、咳、その他シカ流行のため休校せる小浜児童へ……三重県尋四男の生徒より人情味の発露せ



小浜校に特効薬を送ったことを伝える記事

粘膜の白斑点及び皮膚の斑点よう仕色をきたす「広辞林」と言われる。小浜校は麻疹の流行で二週間、休校に追い込まれたことを新聞で知り救済の「愛の手」を差し延べた。同校尋常科四年生の担任染川清一郎教諭は「私等は常に日本中、世界中に拡っていて自己を見つめる時間を持つことにしています。それがために日本各地に種々の災難があれば必ずそこの御友達に当ててお見舞状を送ります。慶びがあれば、賛誼の言葉を送ります。

(中略) 私等一同は今地図を見ながらご快方に向はせられるべく御祈りを続けています」と心温まる手紙を寄せている。

麻疹防止用の「犀角」は動物の犀の角で、粉状の漢方薬として解毒、解熱剤として効果がある。真玉橋朝珍校長は「私共は感謝の言葉もありません。当校児童百五十四人は一人の死者もなく全島にわたり早く終息することを願う」とお礼の言葉を述べている。

(通事孝作)



戦前、隆盛を誇った宇多良炭坑跡

《歴史散歩》

宇多良炭坑丸三鉱業所

八重山の近代史を克明に解きほぐそうとした時、西表島の炭坑の歴史は看過できない研究分野である。沖縄で石炭が採掘されたのは唯一、西表島であり、その坑跡は今でも残っている。宇多良炭坑がそのひとつである。

西表島の炭坑は一八八五年（明治十八年）に三井物産会社が、西部の元成屋で石炭の試掘を始めたのが最初である。それ以後、採炭会社は統廃合を繰り返しながら戦前まで経営された。会社は今では歴史の中に眠り、資料の中でしか求めることはできないが、坑跡は着実に歴史を刻んでいる。

宇多良炭坑の跡が残っているということで訪ね歩いてみた。同炭坑は正式名称を丸三炭坑宇多良鉱業所といい、野田小一郎氏が経営し一九三五年（昭和十年）に開坑した。炭坑への道筋は、浦内川の船着場から川沿いに歩き、左に曲がる宇多良川を右手に見ながら進む。道路はけもの道といった様相である。船着場を出発して十五分後に視界が開けた。かつては広大な敷地に「炭坑村」形成したといわれるが、今は往時の面影は全くない。

マンゴローブが川岸に生い茂る。ジャングルに覆われた、そこにはレンガ柱の建物跡、レール支柱、古びたエンジン、水道跡、船着場跡等が残っていた。繁栄を誇った炭坑の世界が蘇ってきた。

仲間第一貝塚

西表島東部を流れる仲間川河口の北岸にあり、県道・白浜—南風見線で分断され、無土器貝塚であることが判明している。

同貝塚の発掘調査の歴史は古く、一九五五年（昭和三十年）、山城浩氏、細原徹氏らによって発見され一九五六年（同三十一年）、多和田真惇氏によつて試掘調査が行なわれた。（『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会 一九五六）

その時、青磁片や方形鉄釘が出土した。多和田氏は「下田原貝塚、仲間第二貝塚と同じ系統の貝塚であるが、幾分時代を下向するものであろう」と位置付けた。

発掘調査は、その後、一九六一年（昭和三十六年）に早稲田大学調査団が実施した。その時、八重山地域の考古学編年、いわゆる早稲田編年を発表した。仲間第一貝塚は最も古い第一期に組み入れられた。波照間島の下田原貝塚は、土器が出る遺跡として第二期とされた。一九七四年



仲間川河口の北岸にある仲間第一貝塚

年（昭和四十九年）、文化財調査で同貝塚を訪れた金武正紀氏は石斧、凹石、磨石のほか開元通宝一個を発見採集した。

その後、波照間島の大泊貝塚、石垣島の神田貝塚、大田原貝塚等の研究成果により第一期と第二期が逆転することが明らかとなつた。仲間第一貝塚は、少なくとも七世紀までにわたる時期の遺跡であると理解されている。（『文化課紀要』第十一号 沖縄県教育庁文化課）

発掘調査で最も新しいのは一九八九年（平成元年）に実施された仲間橋梁改修工事にかかる史跡の現状変更調整に伴うもの。貝塚は保存状態は良好ではないが、人工遺物と自然遺物に大きく分類される検出された遺物は、遺物包含層が後世になつて搅乱されたため少量だった。遺物は石斧、敲石、二枚貝製品、貝殻類、獸魚骨類等で乾燥して白色化したものが目立つた。（『文化課紀要』第十一号 沖縄県教育庁文化課）

同貝塚は新石器時代の無土器貝塚といふこともあり、一九五六年（昭和三十二年）十月十九日、県指定史跡となつた。

真徳利御嶽

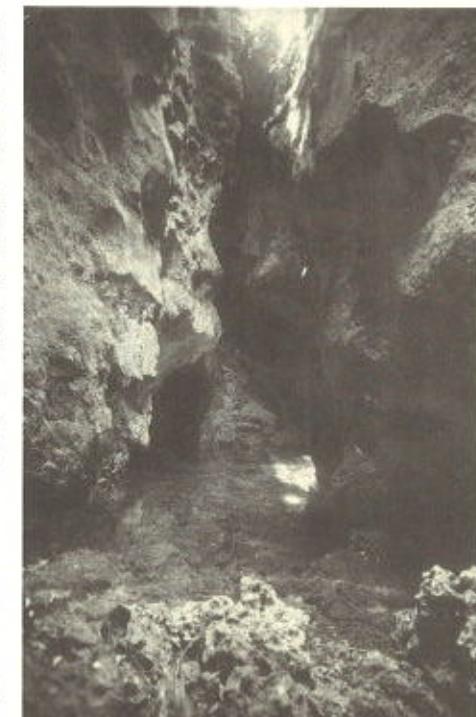
八重山群島の御嶽の由来、イビ名等を記した『琉球国由来記』巻二十一に掲載された波照間島の御嶽である。島ではマーツルワードと呼ぶ。御嶽という言葉は流

と共に „ビテヌワード（野原の御嶽）“ と呼ばれ、御嶽の原初的形態を止めている。御嶽には香炉もなければ、拝殿、鳥居もない。ただ亜熱帯原生林が生い茂っているだけである。神行事の時には線香は立てずニンニク、塩、神酒が供えられる。一般人の御嶽への入域は通常許されず、年三回のミヨークツエの時に限定されている。

『琉球国由来記』巻

二十一に御嶽の由来がある。

地底の聖池スーイン



波照間島では鍾乳洞のことを „イン“ と言うが、地底湖の „スーイン“ は「澄んだ鍾乳洞」「塩水の鍾乳洞」のいずれかの意味であろう。八重山の御嶽の神は

「常住神」と「來訪神」の二つに所在形態から分類できるならば „ビテヌワード“ の神は海の彼方、底から訪れるニライカナイ神に通じると考えられる。

琉球王府が神高い森林、祈願所を一般化して総称したもので、波照間島では „ワード“ と呼ぶ。

真徳利御嶽は白郎原御嶽、阿幸侯御嶽

嶽名同」「御イベ名、ニシセルコヒヤノトノ」とあり、「此嶽屋、アコ與人、拝ミ初ルト也」と表記する。

真徳利御嶽は森林が広がり、常緑照葉樹の大木が天を突く。一步、足を踏み入れると別天地で、ジャングルに迷い込んだような錯覚を受ける。同御嶽の特徴的なことは鍾乳洞があること。そこには青々と水をたたえた “地底湖” がある。古老によると湖は海水からなり、地下から海に通じていると言われる。

琉球王府はシシカドンの死を悼み、息子三人を島の最高役人に任命した。真徳利御嶽を拝み始めたのが長男・アコ与人ということである。『琉球国由来記』巻二十一には「神名、

真徳利御嶽は「アコ与人が拝み始める」というが元来、そこは古代からの島人の祈願所であり、後になって琉球王府が公儀御嶽と認定したのかも知れない。神司は西島本千代さんが務める。(通事孝作)

収蔵図書紹介

寄贈者御芳名	受贈図書名
沖繩大學 八重山博物館	琉球孤絶断移動市民大学 アジアの仮面
石垣市 城辺町 宜野座村 仲本正貴 ひめゆり平和記念 資料料 石垣島製糖 那根武 八重山婦人連合会 八重山のあゆみ「三十年のあゆみ」 村民アルバム 宜野座村誌編集事業完了報告書 糸満市史 資料編⑫ 民俗資料 琉球王国評定文書第七卷	石垣市史近代七、新聞集成Ⅶ 城辺町史第五巻民話編 宜野座村誌第一巻通史編、通史編別冊 道ひとすじ「教職五七年の思い出」 ひめゆり第一号（思想文集） ひめゆり第二号（思想文集） 石垣島の製糖三〇年のあゆみ 「いやり新聞」二十五周年記念誌 八重山のあゆみ「三十年のあゆみ」 村民アルバム 宜野座村誌編集事業完了報告書 糸満市史 資料編⑫ 民俗資料 琉球王国評定文書第七卷
浦添市教育委員会 糸満市 市 糸満市史 資料編⑫ 民俗資料 琉球王国評定文書第七卷	浦添市教育委員会 糸満市史 資料編⑫ 民俗資料 琉球王国評定文書第七卷

受贈図書紹介

多数の個人、関係機関等から
寄贈を受けております。
あわせてお礼申し上げます。

アメリカ合衆国及びカナダ国における地方行政

市政概要

アジア諸国要覧

都市別決算状況調

教育改革の課題

都道府県決算状況調

憲法判断の原理

都市問題辞典

沖縄の民俗芸能

地域統計提要

城辺町高腰城跡範囲調査概報

国政統計ハンドブック

大牧遺跡・野城遺跡

全日本出版物総目録

高腰城跡

現代日本地方財政論

砂川元島

世界文化地理大系

宮古、下地町調査報告書

技術図書館案内

住屋遺跡

都道府県議会提要

平良市の文化財

教育の理念と目的

平良市総合博物館年報No.2

学校教育と教職員の権利

沖縄・脱和の時代

社会教育の自由

美ら島 わがまちふるさと

政治教育・宗教教育

どうなん写真集

新著作権問答

大塚勝久写真集 うつぐみの心

現代の歴史思想

まるま(一号)~七六号縮刷版)

政治思想史

名護市史叢書⑬ 屋我地の民話

最新高等地図

世界を拓いた先人たち

大東亜戦争回想録

名護市

在沖西表郷友会

大塚勝久

沖縄県総務部

知念かねみ

三木健

平良市総合博物館

平良市教育委員会

研究所

沖縄大南島文化研

宮古、下地町調査報告書

住屋遺跡

城辺町教育委員会

南風原町

砂川元島

砂川元島

城辺町高腰城跡範囲調査概報

世界を拓いた先人たち

南風原町

南風原町沖縄戦災調査5 与那覇が語る

学術雑誌総合目録
新聞とニューメディア

沖縄戦

閃光の中で

第十一管区海上保安

南西海域の海上保安二〇年のあゆみ

安部

沖縄県立博物館

壺屋陶芸遺作展

総合調査報告書Ⅳ 浜比嘉島

アジアの祭りと芸能 仮面と音楽

沖縄県立博物館紀要第⑭号

池原・登川のわらべ歌

津嘉山森遺跡 文化財調査概報

平成三年度 こども博物館集録

キャンプへーク跡の植物

沖縄の貝塚

総合調査報告Ⅲ 古宇利島

国頭村海外移民史 本編・資料編

国頭村
竹富町教育委員会

むすびあう島じま

竹富町古説集第一集

国立国会図書館

特攻隊の思い出

わかりやすい海事知識

人と地球を考える

平和の探求

新聞とニューメディア
図書館の機械化
気象の辞典
国際連合憲章の解説
教育行政

マス・コミュニケーション講座①②

世界地名辞典

戦後世界政治の構造

総合安全保障の構図

時事用語辞典

岐路にたつ原子力

民俗の歴史的自覚

日章国旗論

社会科学基礎講座

世界の感覚

日本人名小辞典

新・世界年表

国会統計提要

長崎県議会史

業務日誌

◆一九九五年（平成七年）

二月六日
・町史編集室内定例会議、二月業務予定検討

二月二十日
・官報上製本請負契約（第一回分）光文堂印刷株

二月中新聞集成Ⅱ校正作業継続
・地域史協議会研修会のため那覇へ出張（議員二名、四日まで）

三月二日
・戦争体験聞き取り調査のため波照間へ出張（職員一名、三十一日まで）

三月八日
・町史編集室内定例会議、三月業務予定検討

三月九日
・戦争体験聞き取り調査のため、西表へ出張（職員一名、十一日まで）

三月十八日
・図書備品購入契約、球陽堂書房（五冊）

三月十日
・図書備品購入契約、暁書房（八冊）

三月十四日
・戦争体験聞き取り調査及び官報製本依頼のため印刷会社で業務調整、那覇出張（職員一名、十六日まで）

三月十五日
・図書備品購入契約、緑木堂書房（三冊）

・行政文書分類整理編さん保存業務契約、南山舎
・図書備品購入契約、ロマン書房本店（五冊）
三月十七日
・官報上製本請負契約（第二回分）光文堂印刷株
・三月中新聞集成（II）校正作業継続

三月二十四日
・竹富町史だより第七号請負契約、八島印刷

三月三十日
・竹富町史だより第三号請負契約、ロマン書房本店（五冊）
・行政文書分類整理編さん保存業務終了

三月三十一日
・第十一巻新聞集成（II）、富川印刷より一千冊納品

・官報上製本、光文堂印刷株より二百四十七冊納品
・竹富町史だより第七号、八島印刷より一千八百冊納品

四月一日
・嘱託員・通事孝作、更新

四月六日
・町史編集室内定例会議、四月業務予定検討

四月十一日
・戦災実態調査のため、西表へ出張（職員一名、十三日まで）

四月十七日
・戦災実態調査のため、波照間へ出張（職員一名、十九日まで）

四月二十日

- ・戦災実態調査のため、竹富へ出張（職員一名、二十一日まで）

四月二十七日

- ・地域史協議会研修会のため、那覇へ出張（職員一名、二十九日まで）

五月十五日

- ・町史編集室内定例会議、五月業務予定検討

五月十七日

- ・戦災実態調査のため、西表へ出張（職員一名、十九日まで）

五月十八日

- ・戦災実態調査のため、波照間へ出張（職員一名、二十日まで）

五月二十四日

- ・戦災実態調査のため、小浜へ出張（職員一名、二十六日まで）

五月二十五日

- ・戦災実態調査のため、黒島へ出張（職員一名、二十六日まで）

五月三十一日

- ・町史編集室内定例会議、六月業務予定検討

六月一日

- ・戦災実態調査のため、竹富へ出張（職員一名、三日まで）

六月十日

- ・戦災実態調査のため、西表へ出張（職員一名、三日まで）

六月二十日

- ・戦災実態調査のため、竹富へ出張（職員一名）

六月二十一日

- ・町史編集室内会議、戦災実態調査方法について検討

六月二十三日

- ・竹富町戦没者追悼式出席のため、竹富へ出張（職員一名、日帰り）

六月二十八日

- ・戦災実態調査のため、竹富へ出張（職員一名、三十日まで）

七月三日

- ・戦災実態調査のため、波照間へ出張（職員一名、三十日まで）

七月十四日

- ・戦争体験「手記」寄稿の分、六十四名を編集委員西里喜行氏他十四名へ添削依頼

七月十五日

- ・竹富町少年洋上体験取材のため、出張（職員一名、十五日まで）

七月二十八日

- ・石垣市史編集室と情報交換会

七月二十九日

- ・町史編集室内定例会議、七月業務予定検討

七月二十二日

- ・第十二巻編集専門小委員会、「戦争体験記録」編集について

審議、目次等を検討

七月二十八日

- ・町史編集資料収集のため新城へ出張（職員二名、日帰り）

八月二日

・地域史協議会研修及び県公文書館オープン記念事業参加のため、那覇へ出張（職員二名、四日まで）

・戦災実態調査のため、小浜へ出張（職員一名、十四日まで）

八月七日
・町史編集室内定例会議、八月業務予定検討

八月九日

・戦災実態調査のため、波照間へ出張（職員一名、十一日まで）

八月十日

・戦争体験記録、竹富町の戦況と戦後復興等十五項目（通史）の原稿執筆を編集専門小委員、石垣久雄氏他七氏へ依頼

八月十五日

・日本最南端平和の碑除幕式参加のため、波照間へ出張（職員一名、日帰り）

・戦災実態調査のため、竹富へ出張（職員一名、十六日まで）

八月十七日

・戦災実態調査のため、黒島へ出張（職員一名、十八日まで）

八月三十一日
・戦災実態調査のため、西表へ出張（職員一名、九月一日まで）

九月四日

・町史編集室内定例会議、九月業務予定検討

九月六日

・戦災実態調査のため、黒島へ出張（職員一名、七日まで）

九月七日

・戦災実態調査のため、波照間へ出張（職員一名、九日まで）

九月十三日

編集後記

◆『竹富町史だより』第八号が出来上りました。今号は「竹富町史」第十卷資料編「新聞集成Ⅱ」の発刊をトップにしました。同巻は「新聞集成Ⅰ」に次ぐものです。

◆新聞は大正六年から昭和八年までの時期を対象に戦前、八重山で発行された「先島新聞」「八重山新報」「先島朝日新聞」「八重山民報」使用したこともあり、記事は身近かに感じます。目次を見ながら興味ある記事を抜き出して読むのも利用方法の一つです。

◆竹富町史編集室では現在、「戦争体験記録」の発刊に向けて全力投球をしており、今号には「戦さ場の実相」として黒島出身者二人の証言を掲載しました。戦争体験者一人ひとりに戦争の一場面が読み取れます。



竹富町史だより 第8号

平成7年9月30日 発行

編集発行 竹富町史編集室

沖縄県石垣市字大川10番地

☎ 09808-2-9985

印 刷 八 島 印 刷